イエスは主なり

日本クリスチャン・アシュラム連盟

日本アシュラム

アシュラムとはスタンレー・ジョーンズ師がインドの退修方式を取り入れて創設されたキリスト教の新しい祈祷運動である。

開心・静聴・充満・献身・奉仕　174号

「ペトロ、イエスをいさめる」

マルコ福音書8章31～37節

青梅教会牧師　有馬　歳弘

主イエスは、十字架の死と復活について「はっきりと」語られました。このことを聞いたペトロは「イエスをわきへお連れして、いさめ始めた」とあります。「いさめる」とあるのはその後にある「ペトロを叱って言われた」のと同じ言葉です。ペトロは主イエスをわきへ連れ出していさめ、叱ったのです。ここでは、主イエスとペトロの立場が逆転しています。教師はペトロで生徒は主イエスとなっています。勿論、ペトロの主イエスへの思いの強さをうかがうことができます。

しかし主ははっきりと、きっぱりと言われます。「サタン、引き下がれ」。すぐ前にはメシア告白をして、いたく主イエスを喜ばせました。一転して「サタン」呼ばわりされるのです。こんなに激しい言葉は珍しいのです。「引き下がれ」とはあっちへ行け、というのではありません。「わたしの後ろに廻れ」とか「わたしの前に立つな」「わたしの導き手になるな」というニュアンスがあります。荒野の誘惑においてサタンは三度繰り返して、主イエスを指図しようと試みています。それと同じようにここではペトロがそうしているのです。主イエスは、あなたはわたしの前に立って指示することを止め、わたしの後ろに従う弟子になりなさい、と言っておられるのでしょう。このことは、ペトロの問題ではなく、私たちが心して聞かなければならないことです。

「自分の十字架を背負って」、私たちは、主イエスの真似をして人の救いのために死ぬということはできません。むしろ、主イエスが負っていて下さる十字架に自分の罪という十字架を合わせるのです。そこで、自分の罪において自分が処刑されることを知るのです。主イエスの十字架の命が私を生かしていることを知るのです。自分の命を得ようとしていた時に、実は滅びがあり、自分の命に死ぬとき、永遠の命を得ることを知るのです。

クリスマスの物語は実に不思議です。婚約中のヨセフとマリヤの間に神のご計画が、まるで割り込んで来たように進められます。マリヤは静かな祈りの中で天使の告げる、いわゆる受胎告知を受けます。「どうして」そんなことが、と戸惑うマリヤはそれを受け入れます。ヨセフも結婚前に身ごもったマリヤのことで悩みつつ神のお告げに従い結婚します。神のに従うことから、始められています。

（日本基督教団　青梅教会牧師）

霊想

「聖霊によりて」

日本イエス・キリスト教団
香登教会
牧師　工藤　弘雄

エルサレムの屋上の間に上がり、約束の聖霊を待ち望む弟子たちの集まりは、いわば第一回のアシュラムと言えるでしょう。主イエスはお命じになられました、「エルサレムから離れないで、かねてわたしから聞いた父の約束を待っているがよい。すなわち、ヨハネは水でバプテスマを授けたが、あなたがたは間もなく聖霊によってバプテスマを授けられるであろう」(使徒1：4・5)。これは、主のご命令です。マタイやマルコの福音書では、主は宣教の大命令を下しておられます。全世界に出て行け、福音を宣べ伝えよ、すべての国民を弟子とせよ！しかし、ここでは、出て行くな、エルサレムを離れるな、と言われるのです。全く正反対のご命令のように思われますが、二つの命令は一つです。

主イエスは、ご存知でした。聖霊なくば弟子たちは全く無力である。しかし、聖霊さえお臨みになられれば、主の証人となり、殉教さえも厭わない。弟子たちが聖霊の存在になることを誰よりも願われたお方は主イエスでした。

思えば、主イエスご自身、聖霊のご存在でした。聖霊により懐胎され、公生涯に立ち上がられるとき、ヨルダン川でバプテスマを受け、祈りおる中で聖霊のお臨みにあずかり、聖霊に満ちてヨルダン川から帰り、荒野を御霊にひきまわされて、悪魔の試みを受け、全き勝利を得て御霊の力に満ち溢れガリラヤに帰り、ナザレの会堂で開口一番、「主の御霊がわたしに宿っている」(ルカ4：18)と語られたのです。

ところが驚くことに、復活、栄光のご存在になられてからもなお、使徒たちに、「聖霊によって」命じられたというのです(使徒1：2)。主イエスの切なる願いは、弟子たちがご自身同様に聖霊の存在になることでした。だから、エルサレムから離れるな、父の約束を待て、と命じられるのです。聖書に神の約束は星の数ほどあります。しかし、「父の約束」とは、約束の中の約束、父の最高最大の約束です。その約束は、主イエスご自身、かねてから重ね重ね語られたものでした。特にヨハネの福音書14章から16章にかけて、主イエスは、ご自身に代わる「もう一人の助け主」のご降臨について語られました。

「わたしは父にお願いしよう。そうすれば、父は別に助け主を送って、いつまでもあなたがたと共におらせて下さるであろう」(ヨハネ14：16)。お願いする御子、答えられる御父、留まりたもう御霊！主イエスに代わるもう一人の助け主、パラクリトスなる聖霊！このお方のお臨みこそが、父の約束であり、最高最大の祝福なのです。このパラクリトスのご降臨のために、主は十字架、復活の贖罪のみわざをなしとげ、栄光を受けねばなりませんでした。ですから、「わたしが去って行かなければ、あなたがたのところに助け主はこないであろう」(ヨハネ16：7)と言われたのです。

かつて有馬修養会で御牧硯太郎先生は、「我行かん、彼来たらん」との主のお言葉を思いめぐらしながら、林の中を逍遥していた時、主イエスのお声に変わって御霊のお声を聞いたというのです。「彼行けり、我来たれり！」その聖霊の圧倒的なお臨みを受け、先生はひれ伏したとのことです。歌舞伎の回り舞台ではありませんが、枯れ木の冬景色から百花繚乱の春景色、俄然開かれた聖霊時代の到来です。

心を開き、静かに主の御声を聴き、聖霊に満たされ、献身と奉仕に導かれる。かつて、聖霊を待ち望んで主のみ前に出て、ひたすら心をあわせて祈った弟子たちに、聖霊が臨み、一同は聖霊に満たされ、万事聖霊、万事祈祷の「聖霊によりて」の存在となり、献身と奉仕の生涯に導かれていったように、私たちも身も霊もささげて、聖霊に満たされ、主の働きに勤しむものとさせていただきましょう。

立証

「神様の声を聞くことが出来ました」

牧之原キリスト教会
鈴木　光子

アシュラムの集会があるということは以前から聞いていましたが、静岡に来て参加を勧められ一昨年初めて参加させて頂きました。その当時私達は原発事故の為静岡に避難して来ていてこれからどのような道に進めばよいかと迷っていた時でした。静岡へ転居するのがいいのか、それとも福島に戻った方がいいのか悩んでいました。二日目の祈りの時、この事について神様の声を聴かせて頂きたい、み言葉を頂きたいと祈りました。祈りの中で神様は御言

葉を下さいました。それは「測り縄は、私の好む所に落ちた。まことに、私への、すばらしいゆずりの地だ。」という御言葉でした。

この原発事故の中で、主人の中々良くならない病気、これからの老後の生活、何か役に立たせて頂きたい教会生活等を考え、此処静岡に移住して牧師親族と暮らせるならそれは望ましいことだと思いました。しかしそう簡単に叶えられる事でも、決められる事でもありませんでした。しかし神様は御言葉を通して私に「ここに住んでもいいんだよ」と言って下さったように思いました。神様が導いてくださったのだと思った時、今までの悩みが消え、平安が与えられました。そしてこの事を受け入れ静岡に移住する決心を致しました。

アシュラムを終えて家に帰った後、神様は次々と静岡に止まる道を備えてくださいました。主人の病気も徐々に回復し、共に七〇歳を超えた私達では到底出来ない事を、神様は多くの協力者を与えて成させて下さり、無事静岡に転居することが出来ました。福島の住居も丁度良い時期に売却出来、牧之原に中古住宅を購入する事が出来ました。何よりも「老後は教会の近くに住みたい」という私達の願いを叶えて下さった事は本当に感謝でした。この一年半の間にこのように進められて来た事は驚くべき事で神様のなさる業としか言いようがありません。全ては神様の恵みとあわれみであり、神様のご計画の中で此処に導かれたと信じ感謝しています。又神様は、「あなたの行く所どこにおいても、主を認めよ。そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。」のみ言葉をもって、此処が私達の居る所であると確信させて下さり止まる道に励ましを与えて下さいました。この事のためには多くの方々の背後の祈りがあり成し遂げられたと感謝しています。アシュラムに参加させて頂いて、神様の声を聴く事が出来、平安と道が備えられた事を感謝しています。「静まって、わたしこそ神であることを知れ。」神様の声を聴く事が進むべき道の道しるべであると教えられました。

第五回函館栄光キリスト教会ミニ・アシュラム報告

佐々木　雄次

当教会のミニ・アシュラムは、一〇月一三、一四日、「なおも望みを抱いて、信じ」を主題に、助言者として日本基督教団青梅教会牧師有馬歳弘先生をお迎えし、四〇名（うち他教会からは八教会、一五名）が参加しました。

「福音の時」、有馬先生は「アブラハムの信仰」について、ていねいに説き明かしてくださり、多くのことを教えられました。特に思いましたのは、アブラハムの信仰とは、彼の不信仰にもかかわらず神さまの真実が、彼の中で動かしがたいものになっていった、ということです。アブラハムの不信仰にもかかわらず神さまは、ご自分の方から彼に近づかれ、約束を実現されました、そのようなされ方を有馬先生は「神はアブラハムの不信仰を担ったのです」とおっしゃり、主イエスの十字架に結びつけ、「主が担われた十字架の重さはわたしどもの不信仰です」とお語りになりました。わたしたちの信仰生活は神さまがわたしたちの不信仰を担ってくださるから可能になる。そう思いました。

一日目のプログラムの最後は「賛美と証しの時」でした。日曜日の午後ですから、これまではほぼ当教会の会員が証しや賛美を受け持ってきましたが、今回は、救世軍の木村敏行小隊長が東日本大震災の支援活動についてお話しくださり、日本基督教団の鈴木園生姉、それに助言者と一緒においでになった有馬一栄姉が証しをしてくださり、感謝と賛美に満ちた時でした。

「充満の時」には多くの出席者が証しをされた後、皆で輪になり、手を取り合って「歌いつつ歩まん」を賛美し、祝祷をもって閉会いたしました。

先日、はじめてアシュラムに出席されたフォースクェア教団の姉妹がお訪ねくださり、このたびのアシュラムで大きな恵みを与えられたが、出席することになったのは、函館朝祷会の時、救世軍の木村照子姉から「楽しいからあなたも行きましょう」と誘っていただいたからだ、と教えてくれました。このように、少しずつこの地域にアシュラムの恵みが広がってきたことをうれしく思う者です。

第51回関東アシュラム報告

安藤　脩

昨年、節目となる「50周年記念大会」を行ない、心新たに、第51回を計画してまいりました。委員会において最も多くの時間を掛けて検討したのは、いかにしてアシュラム運動を拡大し、若い世代へ継承して行くかということでした。それで、経済的に余裕があるわけではありませんが、初参加の牧師と神学生は参加費を無料にし、交通費も補助しようという、大いなる決断を致しました。そしてそのことをパンフレットに書くだけでなく、委員が知り合いの牧師に声がけし、お誘いいたしました。

開催日時・2013年9月16日（月）～18日（水）。会場・山崎製パン箱根山荘。主題・「私にゆだねられたもの」（Ⅱテモテ1：12）助言者・島隆三師で開催されました。

当日は、台風が直撃するとの天気予報が出され、前日から事務局と電話で何回か連絡をとりあいました。16日の開催直前の正午ごろ関東に上陸するのではとのことで、一時は、第一日目を取り止めにし、プログラムを組み直して2日目からの2日間で行おうかとの案も出ました。しかし、最終的には委員長決断で、予定通りに決行しました。参加者も不安があったようで、当日の朝早くから「今日から行われるのですか？」との問い合わせもありました。時間をずらして前日に家を出た人もいました。でも、飛行機や新幹線が運行せず、出席を断念せざるを得ない人もでました。しかし、開会を30分遅らせただけで、大部分の人が集まり、開会できました。1日遅れて、電車が運行するようになったからと参加した方もおられました。

このような状況の中で参加した人々はアシュラムの必要を感じ、大いに愛している人々ですから、豊かに恵まれた51回アシュラムになりました。参加者は台風の影響もあって36名でした。

オリエンテーションは横山師が、初参加の教職も意識してか、「アシュラムとは何か」をスタンレー師の「ミニアシュラムの守り方」を用いて説かれました。アシュラムは神のみ声を聞きたいとのニード、神の声を聴く交わり、すべてのプログラムを通して、コイノニアを取り戻す運動であると方向付けをされた。

助言者の島師は、「テモテの流した涙」は自分も恩師から手を置いて祈ってもらった時、流した涙と同質であったろう。私たちの福音は誰から学んだかが大事と語られた。それを伝えた人々の人格が誤りないものであること、そして、決め手は、変わることのない聖書を土台にしていることであると語られた。

■日本クリスチャンアシュラム連盟 拡大理事会報告

2013年10月23日、於・池の上教会。連盟60年誌編纂のための拡大理事会が開催され、10名の理事並陪席者が出席。

編纂の目的構想、レイアウト、予算、その他の件について検討し、

・2014年度内を完成目標とする。

・実務委員として、横山義孝、木部安来、安藤脩、島隆三、飯島庸江、川村秀夫、石井寛（敬称略）が選任されました。

消息並アシュラム予告

▼辻中昭一師（日本クリスチャンアシュラム連盟理事・関西アシュラム委員）

同師は'13年8月11日急性心不全のため召天されました。御遺族のうえに主のお慰めを祈ります。

●第43回城北アシュラム

と　き　'14年2月11日㈫午前10時～午後4時45分

ところ　日本基督教団新宿西教会

●第21回東京新生教会アシュラム

と　き　'14年2月15㈯～16㈰

立証者　長田慶子姉（日キ教団更生教会）

〒一八一―〇〇一一　三鷹市井口3―15―6
池の上キリスト教会内
日本クリスチャン・アシュラム連盟
振替口座　東京〇一〇〇―一四五五八